

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第九回

12章 天馬降臨

かえい
嘉永三年（二八五〇）

かえい
嘉永二年（二八四九）は、洪庵こうあんにとって大いなる転換点となった年だった。

けいじ
慶事となる出来事が三つもあった。

ひとつめは言うまでもなく、牛痘ぎゅうとうを得て、大坂じよとうかんに除痘館を立ち上げたことだ。

びようがくつうろん
ふたつめは「病学通論」が刊行に至ったことである。
話は江戸の修学時代に遡る。

うだがわげんしん
江戸の師・宇田川玄真は晩年、病理学大系の樹立を計画し、弟子
つばいしんどう
の坪井信道門下の俊英しゅんえい・青木周弼あおきしゅうすけにドイツ人、フーフェラントの
おがた
病理学書を、緒方洪庵にやはりドイツ人・コンスブルックとコンラ
ジの病理学書を翻訳させ、それらを折衷せつちゆうして編纂へんさんを続けていた。と
ころが、半分も書かないうちに没してしまった。

そこで洪庵は玄真の遺稿いこうをもらい受け、ハルトマンの病理学、リセランド、ブリュメンバツハ、ローゼの生理学、スプレングルの治療総論などの諸書に加えて化学、物理学書まで参照して補訂を重ね、原稿を全面的に書き直した。

書き直しのたびに書名は「遠西医鑑病機編」えんせいいかんびょうきへん「遠西原病約論」げんびようやくろん「病学通論」と変わった。

師の坪井信道が寄せた「病学通論」の序によれば、更改は実に七十八回に及んだという。

訳了した二年後の嘉永二年四月、ようやく出版の運びとなった。

「病学通論」は「生機論」「疾病総論」「病因総論」「病証総論」の四部構成である。病気には原因があり、病因を解明して治療法を導く、という近代医学の方法論を明確に打ち出している。これは洪庵が手がけた代表的な翻訳事業のひとつとなった。

今は亡き師匠から委託された、長年の懸案けんあんを果たした洪庵は、肩の荷が少し軽くなった。

そして慶事のみつつめは、福井藩はんの侍医じいの子、橋本左内さないが入塾したことである。

撫なで肩で小柄な少年は、元服げんぷくを済ませたばかりの初々しい若武者だった。そして、蘭学の合戦場ごうせんじやうのような適塾てきじやくに現れると、たちまち頭角とうかくを現していった。

恵まれすぎた境遇ゆえに、駿馬しゅんまと呼ばれながら学業に集中できず辞めていく若者がいれば、不遇の環境から這はい上がろうとして、死に物狂いで学問にかじりつく驚馬どばのような青年もいる。

その一方で豊かな天稟てんびんと恵まれた環境を存分に活かし、持つて生まれた才という天与てんよの翼を羽ばたかせ、軽々と飛翔していく天馬てんばのような若武者もいた。

そんな天馬てんまの如き青年が適塾の門を叩いたのは、伊藤精一（後の伊藤慎蔵）が入塾した少し後、木枯らしが吹き始めた師走しわすの頃だ。

その日は洪庵自らが、二階の大広間に新人を連れて来た。

「福井藩の藩医のご子息の橋本綱紀つなのり殿だ。十六歳は当塾の最年少だな。みんな、兄貴分として面倒をみてやるように」

前髪を上げたばかりの少年は、凜とした声で言う。

「橋本綱紀と申します。父母からは左内と呼ばれております。若輩じやくばい者ものですが先輩方、ご指導、よろしくお願いいたします」

少年らしからぬ、堂々とした言葉遣いで、礼儀正しく一礼する。

左内には新顔の指定席である西の隅すみ、階段の側の畳たたみが居場所にあてがわれた。

左内は、小机を置くと正座をし、風呂敷ふろしき包みを開いて書物を取り出した。

隣の畳には、そこから昇格したばかりの伊藤精一がいた。

「そこは一番悪い場所で、夜中に小用を足す者に起こされたりするんで大変だよ。でも十日後に会読があつて、そこで成績順で好きな場所を選べるから、それまでの辛抱だよ」

兄貴分のように面倒を見ようとする精一に、橋本左内はにっこり笑い、首を横に振る。

「小生は十五で元服した時、いかなる環境でも修学を怠るまいと一念発起して、『啓発録』という書を認め、誓いましたので、一向に気になりません。学問さえできればいいのです」

「偉いなあ。俺なんて、三回目の会読で、やっと少しマシな場所に移れたけど、それでもこの場所だからなあ。先輩たちも必死だから、そう易々と成績は上がらないよ」

すると精一の隣であくびをしていた先輩のひとりが言う。

「よう、新入り、お近づきの印に、牛鍋屋で一杯、やろうぜ」

その先輩は、羽振りのよさそうな新入りを見ると、酒をたかるので塾生には敬遠されていた。

左内は微動だにせず、言う。

「小生は学を成すまで酒は嗜まないと決めております。せつかくのお誘いですがお断りします」

「新入りのくせに、先輩の誘いを断るとは生意気なヤツだな」

すると左内はその先輩に向き直り、背筋を伸ばして言う。

「小生は父より、早く学を成し国に戻るよう、申し渡されています。

一刻も早く医を極めなければならない身なのです」

生真面目な言葉に毒気を抜かれ、先輩は舌打ちをした。

「なんか白けるぜ。精一、俺たちだけで行こうぜ」

はあ、と生返事をして立ち上がった伊藤精一は、部屋を出ていく前に振り返る。そこには端然と座し、書と向かい合う橋本左内の姿が、ぼうつと光を放っていた。

伊藤精一は、学問には真摯に精根を傾けていた。実際、彼は蘭語だけではなく、数学の才もあり、次第に周囲に認められていった。

そんな精一だが、酒の誘惑には弱かった。

彼は「ゾーフ・ハルマ」を筆写しつつ、六日に一度、仲間と牛鍋屋で飲んだ。

だがどれほど酔っていても、蘭書を熟読する日課は欠かさず、成績はじわじわ上がっていった。

ところが左内は、そんな精一のはるか頭上を、軽々と飛び越えて行ったのだった。

適塾は放任主義で、厳格な規則はなく、無頼者のような所業が見られることもある。

身なりも粗末そまつで不潔ふけつだった上、市中で喧嘩けんかする者も絶えず、適塾生と聞くと、ゴロツキを見るように眉まゆを顰ひそめる市民も多かった。

だが温和な洪庵は、滅多に敵しいことは言わなかった。塾生が喧嘩をして傷つけた相手に謝罪し、ことを穏便に収めるようなことも日常茶飯事だった。

それでも時に、あまりにも度が過ぎる者は破門はもんにしたりもした。主に、指導的立場にある塾頭クラスが酒色しゅしきに耽ふけつたり、学業がくごうを疎かにした場合だった。

そんな時は八重やえが陰で取りなした。八重は塾生に分け隔てなく親切で、陰口を嫌った。

だから暴れん坊の塾生も、八重に何か言われると、言い返せずしゅんとなった。

そんな八重も、女色に耽る塾生は嫌った。

八重は適塾生の最後の頼みの綱なので、彼女に嫌われると相当居づらくなる。

また、学業についていけなくなれば、自ずと退塾となる。

そんな敵しい環境だったが、伊藤精一には適塾の環境が性に合っているようだった。

席次順に居場所を選ぶという方法は、学力だけが基準であり、そこには身分の上下もない、平等な仕組みだった。

身分が低く財もない青年にとって、自分の力で道を切り開くことができるという、当時としては極めて稀有な、魅力ある場所だった。

袋小路^{ふくろぢ}で突き当たった壁。そこに開いた、僅かな^{わず}ひび割れ。

そこから、一条の光が射し込んでくる。

精一のような徒手空拳^{としゆくうけん}の若者たちの目には、適塾はそんな希望の楽園に映っていた。

三歳下の塾頭の村田蔵六^{むらたぞうろく}は同郷ということもあり、蔵六、精一殿と呼び合う仲になった。

精一は、古参^{こさん}の塾生をごぼう抜きして、いつか必ず蔵六の隣にたどりついてやる、と息巻いていた。ところが、そんな精一の前に新たに立ちはだかったのは、全く異質の存在だった。

後輩で年下の橋本左内が、あつという間に精一を飛び越えて行ってしまったのだ。

適塾では初級者は八級から始め、月六回の会読でトップをとり続ける^つると次の級に進級できる。

そして一級になることを目指して、誰もが死に物狂いで努力する。ところが嘉永三年（一八五〇）春、左内は昇段のルールを軽々^{りようが}と凌駕^{りようが}して、三カ月足らずで上級組に入ってしまったのである。

それは優劣を判定する会頭よりも優秀だということが、誰の目にも明らかになったための、異例の待遇だった。

会読で、最初に当てられた塾生がたどたどしく訳し始める。

「デ・オルデン、詞が、ウエルケ、それは、ヘット サーマンステル エーネル ターレ……」

だが、そこから先に進めず口ごもると、会頭が次の者を当てる。

「ヘット サメンステル エーネル ターレ、国詞の、サーメンステル、組み立てをなす所の、オイトマーケン、オールデン、オールデン、詞が……」と次の者もまた行き詰まる。

一向に先に進まないことにしびれを切らした会頭が、続きを言う。

「セイン・ハン・オンデルシケーデン、種々の、アールド、性質のもので、セイン、ある、エン、そうして、ダラーゲン・フルシキルレンデ、様々の、ベナーミンゲン、名付けを、ダラーゲン、持つ。

すなわち『詞が、それは国詞の組み立てをなす所の詞が種々の性質のものである。そうして様々な名付けを持つ』という文意である」

その文はさっぱりちんぷんかんぷんで、日本語になっていないが、とな異を唱える者はいない。

何しろ、この中で一番出来るのが会頭なのだから。

しかしそこに凜とした、涼しい声が響く。

「失礼ですが、それでは意が通じません。この文は『詞は順序によって性質が変わることがあり、様々な名称で呼ばれる』という意味だと思いません」

会頭は「うむ。その通りである。左内が今回の会読では一等である」と言い渡し、最高評価の『△』をつける。

そのやりとりを聞いて、メンバーは、ほう、と吐息をつく。

誰が見ても、会頭より左内の方が格上なのは一目瞭然だ。

だからこそその破格の飛び級だった。

一級生の上には最上級という特別クラスがあった。そこでは師範の洪庵の講義を直接聞くことが許されるので、塾生の誰もが目指す、憧れの到達点だった。

だが左内は、いつの間にか、その最上級のクラスに入っていた。

塾生たちはそんな左内を、一種の畏怖を込めて、「池中の蛟竜」と密かに呼んでいた。だが精一は素直に「天馬」と評した。

左内の勉強法は、他の塾生とは次元が違っていた。

彼は「ゾーフ・ハルマ」には手を付けず、上級生でも滅多に使わない全四冊の「ウェイランド辞典」を主に参照していた。

「なあ、左内。お前はどこか他の塾か何かで、オランダ語を学んだことがあるのか？」

ある日、伊藤精一がそう訊ねると、左内は静かな声で答えた。

「ええ。長崎の蘭通詞の猪俣伝右衛門殿のご子息の猪俣瑞英殿が来福した時、わが家に一年ほど寄宿しておられました。その時に直接、懇切丁寧に手ほどきを受けました」

——なんだ、もともと才のあるヤツが、オランダ通詞に一年間みっちり家庭教師してもらって、大才になったというわけか。

これではとても敵かたいっこない、と精一は愕然がくぜんとした。
だがすぐに思い直す。

——左内は天馬、俺は驚馬だ。驚馬には驚馬のやり方がある。

何しろ適塾は、家柄も財力も無関係に、自力でのしていける、平等な世界なのだ。

そこには、洪庵が望んだ社会が、実現していた。そこには今は亡き師・天游てんゆうが恋い焦がれた「フレイヘイド（自由）」の精神が、厳然とそびえ立っていた。

実はそれを体現する存在こそ、伊藤精一だったのである。

左内の煌ひかりびやかな活躍ばかり目立ったが、精一も、適塾で抜きん出た存在になりつつあった。

塾頭の蔵六は緻密にひとつのことを究きわめていく、大工道具でいえば錐きりのようなものだ。

一方の精一は大雑把おおざっぱだが広く浅く学び、どんなこともたちまち理解して、自家薬籠中じかやくろうちゆうの物としてしまうようなところがあった。大工道具でいえば、鉋かんなに似ていた。

そんな好一對のふたりは気が合い、親友になった。そして後輩の塾生は、蔵六よりも精一に教こえを乞うことが多かった。

蔵六に教わると、本当にわかったと思われるまでとことんつきつめられるが、精一はざっくり教えた後は放任するので気楽だった。

そんな二人の頭上を駆けていく左内はあまりにも若く、孤高であり、唯我独尊に見えた。

なので、塾生たちは敬遠して遠巻きに眺めている、という塩梅だった。

そんな三人が一堂に会したこの時期は、適塾の第一次黄金期だったといえるだろう。

左内が最上級のクラスに入った数日後、洪庵が二階の大広間に入ってきた。

「先ほど、奉行所からお達しがあった。明朝、葭島で斬首があり刑死体が出るので、解剖許可が出た。適塾には見学医十名、解剖医二名のお許しが出た。見学したい者は挙手しなさい」

会読のない昼下がり、部屋にいた塾生はちようど十名で、全員が挙手した。見学医の枠が埋まると、洪庵は塾頭の村田蔵六に「解剖係を務めるように」と命じた。

蔵六の頬が紅潮する。

解剖係は見学者に解剖の要諦を示し、質問に答える。答えられなければ赤恥を掻くという、恐ろしい審判の場でもある。

しかしながら解剖係に任じられるのは大変な名誉である。

特に塾頭に就任したばかりの蔵六にとって、初の晴れ舞台だった。

こうした解剖見学の仕組みを作ったのは洪庵だった。

てんぼう

天保十三年（一八四二）、洪庵は「独笑軒塾」を主宰する義弟の

いくぞう

緒方郁蔵と共に、解剖社中を結社した。メンバーは三六名で、幹事

しつどう

が八人、執刀者は十二名だ。

以後、毎年五月と十月に、男女一体ずつの計二体の刑死体を解剖する慣わしとなった。

よじやばし

翌朝、適塾生十二名は、淀屋橋のたもとから、「適塾」と書かれた

のぼり

幟を立てた二艘の川船に分乗して出発した。直後に「南塾」という

にぞう

幟を立てた船も支流から合流した。緒方郁蔵が率いる「独笑軒塾」

の塾生の船である。

きづがわ

さんげんやがわ

なかす

木津川と三軒家川に囲まれた中洲にある葭島に到着すると、岸边

に建てられた臨時の小屋に、青年たちが次々に入っていく。

そこが解剖所だった。

小屋の入口で入場券を購入して中に入るが、適塾生は入場料が免除となる。

台上には今朝方、斬首された罪人の頭が置かれ、隣に身体が横たえられている。

刑死体は男女一体ずつの二人分で頭がふたつ、身体がふたつ、四

箇所解剖台に安置された。

頭と胸、腹の三位を、それぞれ二名ずつ担当して解剖していく。執刀者にはたいい適塾生が指名された。

一回の解剖の参加者は六十人前後だった。

無念そうな罪人の顔を目の当たりにして、精一の表情がこわばる。作業着姿の村田蔵六が歩み出る。他の台でも二人ずつの執刀医が所定の位置に着いた。

「ただいまより、頭部の解剖を執刀いたします」
いつになく緊張した声で、蔵六が宣言した。

精一は食い入るように、蔵六の手元を凝視した。

彼の目には、メスを焔めかせ、臓器や骨を次々に取り出していく、蔵六の手際のがさが焼き付けられた。時間はあつという間に過ぎた。

「以上で解剖を終わります」と村田蔵六が言い、拍手が湧いた。
それは滅多にないことで、それくらい蔵六の手際は見事だった。

特に頭蓋骨の中心部にある、蝶ちようのような形をした蝶形骨は繊細で、壊れやすく、それを無骨な蔵六の指が躍り、易々と取り出したのが、鮮烈な印象として残った。

適塾の塾頭として解剖医を務め、拍手喝采かっさいを浴びる蔵六に、精一は羨望せんぼうの眼差しまなざしを向けた。

帰りの船中、精一は、生まれて初めて見た解剖の光景に、興奮さ

めやらない様子だった。

周りの誰彼構わず、興奮した口調で語りかけたため、淀屋橋の船着き場に戻って来た時には、ぐったりと疲れ果てていた。

だが適塾に戻ると、橋本左内が、いつもと同じように、蘭書の写しを黙々と訳していた。

興奮とは対極の、静かな佇まいたたずを見て、精一は思わず訊ねる。

「おい、左内、お前はさっきの解剖を見て、興奮しなかったのか？」

「はあ。すべて、以前見た通りでございますので」

「え？ 左内は以前、解剖を見たことがあるのか？」

「はい。入塾前、越前で解剖を執刀させていただきました。小生の家は代々医家として、拙つたないながらも故郷で患者に医療ほじくを施しておりましたので、どうということもございません」

精一は唾然あぜんとした。新入生のクセに、すでに塾頭の蔵六と同じ経験けんをしているのか。

するとそれを聞いた精一の隣の、例の先輩が、左内に絡み始めた。

解剖の見学にも行かず、飲んでいたのでろう。息が酒臭い。

「なんだよ、気取りやがって。そのちっこい身体に、我々と同じ赤い血が流れておるか、確かめてくれようぞ」

そう言って、脇差わきざしを抜き放つと、左内の喉元のどもとに突きつけた。

左内は平然としていたが、驚いたのは隣の伊藤精一である。

「先輩、止めてください」

そう言つて、その手を押さえようとした。

もとよりその先輩には、左内を傷つける意図はなく、ちよつと脅おどそうとしただけだった。

だが、武芸の嗜みがない伊藤精一は、あわてふためいてしまった。

精一の予期せぬ動きに手元が狂い、先輩は手にした刀で自分の脛すねを切りつけてしまう。

血が盛大に吹き出てきて、先輩の塾生は悲鳴を上げてへたりこんでしまった。

「おい、左内、お前は医家のまねごとができるんだよな？ 手当し
てくれよ」

左内の肩を掴つかんで揺ゆする精一の顔を、黙つて見た左内は、やがて立ち上がると、階下に下りていった。そして煙草盆たばこぼんを手に戻つてくると、傷口を押さえている先輩の側に座った。

煙草盆には火の入った炭が赤々と燃えている。精一が息を呑んで見守る中、左内は火箸ひばしで、真っ赤に焼けた炭を取り上げる。

「な、何をするつもりだ」

怪我人けがにんの先輩が驚いて訊ねると、左内はあつさり答える。

「小生は刀傷の手当てをしたことはございませぬ。されど火傷やけどの手当は経験がありますので、傷口を火箸で焼き、火傷とすれば、小生

にも手当ができるかと」

「や、やめてくれ」と先輩が叫び声を上げた。

その声を聞きつけた塾頭の村田蔵六と、古参塾生の佐野栄寿が「何事か」とやってきた。

刀傷を見た佐野栄寿が言う。

「これは外科処置が必要ですね。洪庵先生をお呼びしますか？」

村田蔵六は首を横に振り、厳かに言う。

「洪庵先生は外科が不得手ふえてであります。いつものように合水堂がっすいどうに頼むのがよろしいかと」

「でしたら、私が運びましょう」

佐野栄寿が言うと、橋本左内も立ち上がって言う。

「合水堂に行くのでしたら、小生も同行いたします」

そうして出血した先輩を二人で抱え、大広間を出て行った。

その機を捉とらえて、左内が適塾と並行して、ちゃっかり「合水堂」にも入門を決めてきた、という話が後日、広まった。

実は左内の祖父と父は、華岡青洲はなおかせいしゅうの春林堂しゅんりんどうの門人で、外科を修養していた。なので左内が合水堂に入門するのは、橋本家の人間としては、ごく自然なことだったのである。

その日以来、橋本左内の周りには近寄りがたい空気が広がった。

だが一心に勉学に励む左内は、周囲の変化など一向に気にする様

子もなく、ひたすら書籍を読み込んでいた。

半年もすると左内はフーフエラントの原書を読み、師・洪庵の訳文の問題点を指摘するまでになった。

もはや左内の実力は、塾頭に任じられても不思議がないくらいの領域に達していた。

*

嘉永四年（一八五二）五月、左内は道頓堀で横井小楠と出会った。

「一代の木鐸、百世の師表」と藩主から高く評価された小楠は、この年の二月から八月にかけて、上方から北陸の二十余藩を遊歴し、知見を高めていた。

五月四日、滞在している宿に小楠を訪ねたこの時、横井小楠四三歳、橋本左内十八歳。

翌日、再訪した左内に小楠は、熊本に來ないかと誘った。

熊本には、適塾で五年間、塾頭を務めた奥山静淑がいた。彼の元には村田蔵六も一年ほど修学したことがある。

左内は早速、熊本遊学を父に打診したが、許されなかった。

小楠はその後、福井に立ち寄り歓待された。

やがて小楠と左内は深く理解し合うようになる。

ただし左内は、小楠にさほど心酔はしていなかった。

それはおそらく、自分と同じ系統の人物であったが故に、あえて取り込むべきものを感じなかったのかもしれない。だが小楠と出会ったことで、左内の政治志向に拍車が掛かった。

左内は彼の影響で、「聖武記」を耽読した。それは天保十三年に、阿片戦争に敗北を喫した清国が領地をたやすく譲り渡す和約を結んだことに憤激した義士・魏黙深が、「国は武装すべきである」という、強硬な警咳を発した、過激な書物だった。それを読んだ左内は自ら「聖武記跋」を書き上げ、塾生たちに檄を飛ばした。

「日本を清国のようにしないため、今こそ立ち上がる時である」
洪庵は仰天して、左内を呼びつけ、きつくたしなめた。

お上に睨まれるようなことを避ける塾則を設けたくらい、用心していた洪庵は、それを台無しにしてしまうような左内の行為は、とうてい看過できない。

洪庵はしつかり、釘を刺さなければならなかった。

洪庵は左内に告げた。

「海外事情を他の塾生たちに説くのは控えなさい。世界を鳥瞰できる具眼の士は、今の日本にいない。世人は異説を唱える者を霍乱者として違逆の禍にかける。たとえば『海国兵談』の林子平殿、『慎機論』の渡辺畢山殿、『戊戌夢物語』を執筆した高野長英殿など、筆禍で

罪に落とされた英俊たちは今の時代、枚挙に暇がないのだ」

だが激しい気性と強い正義感を持つ、高潔な左内は、師の忠告に耳を貸そうとしなかった。

「先生は間違えています。具眼の士がいなければ、育てればいいのです。そのためには今、何が起こっているのか、きちんと伝えなければ、育つべきものも育ちません」

非の打ち所のない反論だ。左内の精神は、洪庵が適塾を開いた時の気持ちそのものだった。

洪庵は、過去の自分に斬り掛からなければならなくなってしまった。

やむなく洪庵は、左内の机を自分の書室に置かせ、翻訳の手伝いをさせることにした。

それは心定まらない塾生から左内の影響力を遠ざけることを主な目的とした苦肉の策だった。

しかし同時に、すでに翻訳を終えていた大作「扶氏経験遺訓」の原稿を左内に推敲させることができるという実利もあった。

その書はフーフエラントが長年、治療に従事した経験から治療法及び医戒いかいを著したもので、オランダのハーヘマンが上下二巻に蘭訳したものだ。洪庵にとつては長年の懸案であり、その書の内容は、適塾の根幹を支える、重要なものだった。

洪庵は心の底から、適塾の天馬の協力を欲していた。もはや左内は、塾生という立場を越え、心強い同僚となっていたのである。

「左内の語学力は、今や私をも凌ぐしのやもしれぬ。今後は私の書齋にて、私の翻訳作業の手伝いをさせ、塾の仕事からは解放する」

洪庵は、左内を特別待遇に遇した理由を、塾生たちにそう説明した。

左内の実力をよく知る塾生たちからは、不満は出なかった。

しかし、当人の左内がこの特別扱いに強く反発した。

「先生の手稿に誤りがあるとは思えませんし、小生の如き浅学な輩やからが、先生の誤りに気づくこともあり得ません。加えて師の誤りを指摘するのは人の道に反すると思います」

そう言って断ろうとした左内に、洪庵はきっぱり言い放つ。

「左内の考えは『小人の仁』だ。私の書に間違いがあれば、それを学ぶ、多くの学生たちに間違いが伝播でんぱしてしまう。師の誤りを正すのは、弟子の重要な役目だろう」

その指摘に、左内はぐうの音も出なかった。

左内は一転、師の手稿を読み込み、誤りを見つけると厳しく指摘するようになった。そして洪庵はその指摘を素直に受け入れた。

天保九年（一八三八）に原書が出版されると、翌年には早くも日本に入っていた。洪庵の翻訳は、天保十三年には一応脱稿を見たが、

洪庵はその後原稿に手を入れ推敲を重ねた。

その訳を読んだ左内は感銘を受け、医術を「刀圭の賤技」と見做してきた自分を恥じた。

医術は、若き左内が思っていたよりも、はるかに深甚なものだといふことを悟ったのだ。

それはまさしく、洪庵の薫陶だった。

左内はその後、医学の習熟にも励むようになり、賀川流の産科医である水原三折「産育全書」を読破した。五十年に及ぶ臨床研究を集大成した全十二巻の大書で、和漢洋の文献を駆使し、自ら発案した器具なども含め、産科技術を図示公開した、画期的な書物だった。

左内は越前藩の藩医の笠原良策から、蘭原書の購入を依頼された。

左内は良書を見つけると躊躇うことなく購入し、笠原良策に送る前に読破してしまった。その中にはゲッチンゲン大学医学部教授ブリュメンバツハの「人身窮理書」などの名著もあった。

「ウェーランド・キヤンスウィールド（キンスト字引）」は三十巻の西洋内科の集大成で、笠原良策は左内にその筆写を依頼してきた。すると当時、ローゼの「人身窮理書」、イスエルシングの「理学書」、^{コレラ}「毘新病理論」などの原書の読破に忙しく、対応しかねた左内は、適塾生に筆写させた。それは大美濃紙百十枚の写本になった。

まるで師・洪庵に成り替わったかのような、仕事ぶりである。

かくして左内の卓越した語学力や企画力、指導力は、洪庵と笠原良策の文通などを通じて、故郷の越前にも知れ渡り、藩主松平春嶽まつだいらしゅんがく侯から奨励金しょうれいきんを拝受するという栄誉も得た。

その頃の適塾では、左内は鶏群けいぐんの一鶴いつかくのような存在になっていた。そんな左内に追いつこうと、伊藤精一は懸命に努力を続けていた。

*

嘉永四年十月、秋の陽射しが穏やかに、部屋に差し掛けていた。部屋で読書をしていた洪庵は、外が何やら騒がしいことに気がついた。

また、塾生の誰ぞが喧嘩でもしているのかと思った洪庵は、立ち上がり、表に出た。すると驚いたことに、塾の前で言い合いをしていたのは、優等生の左内で、相手は二本差しの武士だ。

適塾生は喧嘩早い者が多く、街中でもよく諍いさかいを起こした。けれども品行方正で学業一筋の左内が、そうした争いごとに巻き込まれることはなかった。左内がこんな風に憤いみじおっている姿は初めて見た。「どうしたんだ、左内」と、洪庵が声を掛けると、左内は顔を紅潮させ、訴えるように言う。

「こちらの方が適塾の前で、蘭学臭くて敵わぬ、犬のような匂いだ、

と言われたので、それに反駁はんぱくしていただけでございます」

相手の武家は羽織袴姿はおりばかますがたで供の者を数名連れていて。

かなり身分の高い人物のようだ。

「なにぶん若者が大勢おります故、臭いこともあるかと存じます。

どうか、ご寛恕かんじよくださいますよう」

洪庵が頭を下げると、お武家さまはふん、と鼻先で笑う。

「藩主となり国元の沈滞ちんたいした名ばかりの家老どもを役替やくがえし、ようやくさっぱりした気分で領地を出て、大坂の蔵屋敷に立ち寄ってみると、裏手になにやら面妖めんような建物ができておる。覗のぞこうとしたらこの者に無礼な振る舞いをされたのだ」

するとすかさず、左内が反駁する。

「無礼なのはどちらですか。わが学塾の前で『ここは臭うてたまらぬ』などと聞こえよがしに放言されては、塾の名誉のため、看過するわけには参りません」

武家は、目を細めて左内を見た。その眼光は蛇へびを思わせた。

「臭いものを臭いと言って、何が悪い。身なりが乞食こじきみたいな連中が出入りしているせいではないか。だがそれだけではない。蘭学を学んでいるという、鼻持ちならない臭さが、ぶんぶん臭ってくる。

そんな下賤げせんな建物は、わが藩の蔵屋敷の裏手にあって欲しくないわな」

その言葉で洪庵は、相手の素性すじょうを察した。

適塾の裏手にあるのは彦根藩の蔵屋敷だ。そして彦根藩の新藩主、井伊直弼いいなおすけは蘭学嫌いいで有名だった。

これは相手が悪い、と思った洪庵は、改めて頭を下げる。

「これは彦根藩の新藩主、井伊掃部頭かものかみさままでございましたか。若輩者のご無礼のほど、なにとぞご容赦ようしやください」

だがそれでは収まりがつかない若武者・左内は、吠えるように言う。

「蘭学を学ぶのは、世のため人のためであり、決してひけらかすためではございません」

「は、オランダかぶれの若造がほざきおるわ。血筋も定かならぬ野良犬らしい遠吠えよの」と、井伊直弼はまたも鼻先で笑う。

「そこまで暴言を吐かれるのであれば、小生こせいにも一言いちごんございます。

彦根藩の先代、井伊直亮なおあきさまは大老たいろうの大役をお務めになりながら、

天保の改革を成された水野忠邦侯みずのただくにじょうがなさることに何一つ意見せず、

唯々いいたくたく諾々いたくたくとうなずくのみ。あれでは東北の玩具、『赤べこ』と変わら

ぬ、とのご評判。そのことを踏まえた上でなお、適塾の学徒わらを嗤わらえるのですか」

「ぶ、無礼者」

父を侮辱へんじされた井伊直弼は、顔を真っ赤にして激怒した。

後に「赤鬼」と呼ばれる直弼らしい激しさだ。
すると武家侍の供が口を開いた。

「わが君に成り代わり、この長野主膳しゆぜんがお相手いたす。わが日の本には、本居宣長先生が確立なされた『国学』という、立派な学問がある。なので、あえて夷狄いてきから学ぶ必要はなかるう。お上を支え、民のためを尽くすのに、蘭学など、無用である」

供の言葉に我が意を得たり、と井伊直弼はうなずく。

だが左内はこれも受けて立った。

「本居宣長先生の国学は素晴らしい学問です。小生も多少漢学を嗜みますが、蘭学者を志している身にも、『日本を誇れ』という主張は大いにうなずけるものです。しかしながら、論語にも『温故知新』なる言葉があり、蘭学はまさに知新に相当するものだと考えられます。しかも貴公もご存じの通り、本居宣長先生の本業は医師であり、貴公たちより適塾の精神に近い存在だと言えると思います」

「たわけたことを申すな。本居宣長先生は、医業のため、『古事記研究』が思うようにいかない、と嘆なげいておられるぞ。所詮しよせんは医いとは賤業せんぎようにすぎず、足手まといでしかないわ」

「確かに医は賤業、されど民が求めるところでもあり、政まつりごとを司つかさどる士族が汲み取らなければならぬところではございませぬか。昔からの国学にしがみついても、本居宣長先生の実証主義の精

神を理解しなければ、新たな世に対応できなくなります」

「無礼者。貴様は国学を古くさい学問だ、と申すか」

「そうは申しておりません。小生は、あなた方のお考えが古くさい、と言っただけです」

井伊直弼の国学の師・長野主膳の弁舌は、橋本左内の純真な論理と真つ向から激突し、火花が散った。

そのやりとりを聞きながら洪庵は、なぜこの主従は、たかが書生の若造にここまで突っかかってくるのだろう、と不思議に思った。確かに蘭学嫌いが一番の理由だろう。しかしそれだけとは思えない。

おそらくそれ以上に、左内の全身から発する青臭い理念が、若いながらも老獪ろうかいにも思える目の前の人物の癩かんに障さわったのかもしれない、と思った。

左内の言葉は論理的で、一分の隙すきもない優れた論ではある。

しかし優秀であるが故に、ともすれば人を見下しているかのように見える、時に、人の情の許容範囲を平気で踏みにじるようなところがある。

激した感情を抑えきれなくなった長野主膳は、とうとう刀の柄つかに手を掛けた。

「おのれ、黙って聞いておれば、主君に対し無礼三昧ざんまい。叩き斬って

やるからそこに直れ」

対する左内も刀の柄に手を掛け腰を深く沈め、居合いの形を取った。

左内は、高く澄んだ声で名乗りを上げる。

「我こそは、朝倉義景が家臣にして野太刀の兵法の創始、真柄家宗が末裔、橋本左内なり。覚悟して掛かられよ」

あたりはしん、と静まり返った。

気がつくど、いつの間にか、彼らの周りを野次馬の町人たちが取り巻いている。

洪庵は二人の間に割って入り、腰をかがめた。

「お待ちください。申し遅れましたが、私は足守藩の禄を食む士分の医師で、本塾を主宰する緒方洪庵と申し、この者の師でもあります。漢学者の広瀬旭莊先生のご厚誼を得て、私塾『月近亭』にも顔を出し、漢学の研鑽にも励んでおります。旭莊先生によれば、先の大老、井伊直亮さまの業績は、このような若輩者には理解できない深甚なものとのこと。浅学な若者の無礼は、ひとえに国と民を思う衷心から出た誠ゆえ、なにとぞご寛恕ください」

旭莊は豊後国日田出身で、兄の広瀬淡窓は豊後の三賢と称され、彼が日田で主宰している私塾「咸宜園」には全国各地から俊才が集っている。

洪庵が広瀬旭荘と親しいというのは事実だった。

高名な碩学せきがくの士の名を聞いた井伊主従の表情に一瞬、ひるんだ色が浮かんだ。

だが長野主膳の怒りは収まらない。

刀の鯉口こいぐちを切りかけたその時、背後からのんびりした声があった。

「お武家さまが、天下の往来でむやみに抜刀ばつてうなんぞしたら、どのようなことになるか、ご存じですよね」

「なにやつ」

長野主膳は振り返らずに、怒声を上げた。

丸顔で秀でた額の下、大きな眼を見開いた小兵こひんやうが、咳払いをした。

「拙者は先般、大坂東町奉行に赴任した川路聖謨かわじとしあきらと申します。ここにおわすは浪速なにわが誇る適塾の緒方洪庵先生と、譜代の彦根藩新藩主、井伊掃部頭さまではございませんか。誠に目出度めでたい組み合わせ、着任早々、お二人に一度にご挨拶を済ませられるとはこの聖謨、なかなか運がようございますな」

井伊直弼はじつと川路聖謨・大坂東町奉行を見た。それからちらりと洪庵に視線を投げた。

そして隣の主膳が口を開こうとするのを、手で制した。

「主膳、もうよい。痴しれ者には、何を言っても無駄だ」

若き彦根藩主はそう言うと、ふい、とそつぽを向いた。そしてそ

の場を立ち去った。

場を収めた川路聖謨は、ひとり言のように呟く。

「それにしても、掃部頭殿も変わられたものよ。十三代彦根藩主、

なおなか

直中さまの十四男で養子にも行けず、埋木舎うもれぎのやでくすぶっておられた

頃は、学問を愛し、風流を解する、気の弱いお方だったのだが」

それから橋本左内の肩をぼん、と叩いた。

なおおよ

「過ぎたるは猶及ばざるが如し、窮鼠猫を嚙むと申す。まあ、彼の

ねずみ

お方を鼠ねずみにたとえるのは不屈ふとじき千万せんばんではあるが。いずれにしても、

そなたはまだお若い身、少しは自重じゆうじやうなされよ」

ひょうひやう

そう言い残し、川路聖謨は飄々と場を立ち去った。

ばんしや

川路聖謨は、蛮社ばんしやの獄ごくで弾圧された尚齒会しやうしかいにも顔出ししていた開

明派で、後に日露和親条約の締結を主導する、幕末最高の外交官と

も称される人物である。この時、男盛りの五一歳。

不服ふんぬそうな顔で、その後ろ姿を見送った左内は、血を吐くような

ほんぼし

憤怒ほんぬを迸ほとばしらせた。

「先生がお止めにならなければあのような者たち、一刀の下に切り

たみや

捨ててみせましたものを。これでも小生は田宮流劍術たみやの免許皆伝かいでんの

身ゆえ」

「そんなことをしたら、それこそただでは済まないよ。こんなとこ

ろでくだらぬ勝ち負けにこだわることはない。御奉行さまがおっし

やる通り、自重しなさい。お前は蘭学という戦場では、無敵の勇者なのだから」

「小生は、議論で負けるのがイヤなのです」

「泣き虫左内」と呼ばれていた左内は、溢れ出る涙を拳でぬぐう。そんな風に不安定で、どこか幼さすら感じさせる左内に、洪庵はそこはかとな不安を抱いた。

——この子は、危うい。

洪庵は心中密かに、左内の将来を案じた。

学業は塾内でも飛び抜けて優秀なので、左内の周りにはやつかみや嫉妬、故なき恨みなど、複雑な感情が渦巻いている。

どんな反発も涼しい顔でやり過ごす左内の態度が一層、塾生の反発を募らせていた。

その事件以降、左内の潔癖さには一層拍車が掛かってしまったようだった。

*

左内は、酒も煙草も飲まず、女遊びもしない、高僧のような生活を送った。そして粗暴放埒で学業怠慢な先輩の塾生を叱りつけたりもした。

ところがそんな風に学業一筋だった左内が、晩秋になると奇妙な行動が目立ち始めた。

夕食が済んでしばらくすると、ふい、と姿を消してしまうのだ。

そして戻ってくるのは、決まって夜更よふけだ。

最初は気にとめなかった塾生たちも、頻ひん繁ばんになるにつれ、ひそひそと噂うわさし始めた。

酒の味を覚えたかな？

いや、酒臭くないから呑んではないようだ。

ならばおなごだな。

周囲の見解は一致した。

少しは遊びを覚えた方がよいのだ、と先輩塾生はうなずき合った。

だが左内に反感を持つ塾生は、好機到来とばかりに、洪庵に左内の不行状を告げ口した。

洪庵は学業以外は自由放任主義だった。左内の学業に対する姿勢は文句の付けようがない。ならば多少の素行の悪さでは叱責しっせきするに当たらない。

しかしこうした状況を座視ざししては、せつかくの逸材いつざいを腐らせてしまいかねない。

やむなく洪庵は、塾頭候補との呼び声が高い渡辺卯三郎うさぶろうを呼び、ひそかに左内の後をつけさせた。

尾行から戻った卯三郎がその顛末を報告すると、洪庵も驚いて目を見開いた。

「なんと、左内は夜な夜な、天満橋の下の乞食小屋に通っているとな」

「そうなのです。乞食小屋の夜鷹と懇意でもなったのかと思いきや、左内は痘瘡に罹った乞食の治療をしていました。いかがいたしましたしませう」

洪庵は腕組みをして考え込む。

そのこと自体は、患者に身分の貴賤なく平等に扱うべし、という坪井信道の教えに叶う行動でもあり、本来ならば大絶賛すべき行為だ。

だが洪庵の胸に、かすかな引つかりがあった。

洪庵は日頃から、左内を高く買い「左内は適塾に舞い降りた天馬だ」と言っていた。

それは最上の褒め言葉だった。

だが洪庵には密かに危惧していたことがあった。

左内の行動には一点の曇りもなく、非の打ち所がない。しかし同時に血が通った温もりが感じられないのだ。

すべてが論理で割り切れ、後は寒々とした感情の残骸が残るのみ。その時、盟友・笠原良策の顔が浮かんだ。

彼は左内を高く評価しながらも、去り際に気になるひと言を残して、越前えちぜんに帰っていった。

「左内の善導ぜんどうをお願いします」

——こういうことだったのか。

深く納得した洪庵は、渡辺卯三郎に告げた。

「左内を呼びなさい」

書齋に入った左内は洪庵に、「そこに座りなさい」と言われ、かしこまって正座する。

「毎晩、どこかへ出掛けているそうだね。どこで何をしているのかな」

左内は、拳こぶしを膝ひざの上で握りしめて、答えない。洪庵は努めて穏やかな声で続ける。

「言いたくなければ言わなくてもよい。心配だったので卯三郎に後をつけさせたので、お前がどこで何をしているのかは知っている。

聞きたいのはなぜそんなことをしているか、だな」

「私は先生の教えに忠実に従おうと思っただけです」

そう言って左内は上目遣いで洪庵を見た。

それから小さく咳払いをすると、洪庵が訳述し、適塾へんがくの扁額へんがくにも掲げられていたフーフエラントの遺訓いじゆんの一節を、朗々ろうろうと諳そとらんじた。

「病者に対しては唯病者を見るべし。貴賤貧富を顧ることなかれ。長者一握の黄金を以て貧士隻眼の感涙に比するに、其心に得るところ如何ぞや。深く之をおもふべし」

左内は続けた。

「今、難波橋のたもとにある乞食小屋で痘瘡が蔓延しております。幸い小生は痘瘡済みの身なので、患者の苦しみを少しでも和らげようと思ひ、日参しているのです」

「それは素晴らしいことだ。しかし痘瘡に罹らないための牛痘は効果があるが、痘瘡に罹ってしまった患者に対しては、有効な治療法は知られていないはずだが」

「ですが現在、清国伝来やオランダの風説、または巷の俗説など、痘瘡に対しては百を下らない種々の養生法が世に伝えられています。小生はそれらをひとつひとつ試してみたいのです」

洪庵は思わず言った。

「薬効が不明である薬を見ず知らずの者に施しているというのか。それでは惻隠の情ではなく、単なる学理の追及ではないか」

「おっしゃる通りです。でもそれは、いけないことでしょうか？」

左内の問いには濁りがなく、どこまでも清浄無垢だった。

「良いか悪いかで言えば、良いことだろう。だが、それより今学んでいる医術を深めるため、勉学に専心した方がよいと思うのだ」

「洪庵先生からそのようなお言葉を聞くとは、意外でした。患者には貴賤なく治療を施すべし、ということが何よりも大切だ、と日頃からおっしゃっておられましたので」

「それはそうなのだが……」

洪庵は口ごもり、腕組みをした。

左内の目に、妖しい光が宿る。

眉間に皺しわを寄せている師匠を見つめた左内は、口を開いた。

「先生が小生の考え方を不審に思われているのは重々承知しております。先生もうすうす感づいておられる通り、小生は医は賤業と思っております。医師はその手で扱う患者しか救えませんが、武士になり政を司れば万民を救えます。小生は一刻も早く福井藩に戻り藩主の春嶽候をお助けしたいのです。ですので残り少ない間、できるだけ医を極めたく、乞食小屋に通い痘瘡の治療をしたのです。加えて痘瘡の新しい治療法を見出せばみいだ、小生は洪庵先生を、そしてフーフェラント先生をも超えられると思うのです」

その言葉に、洪庵は打ち砕かれた気がした。優秀で従順な弟子だと思っていた左内は、その心中に鋭い牙を隠し持っていたのだ。

「左内、お前は本当に立派だ。だが、私はお前がいつか道を誤ってしまうように思えてならない。このまま真つ直ぐ進んでいけば、どこかで破綻はたんしてしまうのではないかと怖おそれている。お前は圧倒的に

正しい。だがその正しさは、眩しいゆえに凡人には毒になるものなのだ」

そう言いながら洪庵は、自分の言葉が虚ろに響くのを感じた。

左内は平然と言り返す。

「道理のわからぬお上が作った、意味のない規則を生真面目に守ったところで、民の利にはならないではありませんか」

洪庵は、はっとした。

——左内の言葉は、泰然殿が言っていたことと同じではないか。

目の前の左内の姿に、泰然の顔が重なる。道理で虚ろに響いたわけだ、と洪庵は得心した。

洪庵は力なく、呻くようにして言う。

「ものごとは、もつといい加減にしておくべきだ。先日、井伊の殿さまに突きつけた暴言は度が過ぎていた。あれはお上に楯突いた発言だと取られても言い訳のしようがない」

かつて洪庵は左内を見て、ついに自分が望む分身を得た、と喜びに胸を震わせたものだ。

凜とした言葉は一分の緩みもなく綿密雄大な構想をはらみ、論理は流麗で美しくさえあった。

泰然が山口舜海を得たように、洪庵もついに誇れる麒麟児を手に入れたのだ、と思った。だが、それは思い違いだった。

左内は洪庵とは全く違う人種だった。洪庵は静かに告げた。

「左内、お前はすでに私をも超えている。ただ易経に『亢龍、悔いあり』ともいう。今後はくれぐれも言動に用心しなさい」

左内は両手をついて平伏する。そして顔を上げ、真っ直ぐに洪庵の顔を見て、言う。

「ご忠告、ありがとうございます。でも、ひとつ申し上げます。小生は富貴を極めた者ではありません。ですので何があっても悔いることはございません」

——違うのだ。自分の思想を突き詰めすぎて、自分を追いつめるな、ということをお願いしたいのだ。

そう言おうとして洪庵は口を閉じる。

洪庵は、もはや呻き声を上げることすらできず、弟子を凝視する。

そして、思い直す。自分の懸念は、これから天に昇ろうとする青年にとつては年寄りの繰り言にすぎないのかもしれない。

天馬は覚醒した。

彼の飛翔を妨げるものは、もはや誰もいないのだ。

「学問の邪魔をして悪かったね。下がってよろしい」

洪庵は力なく言った。

一礼した若武者の端然とした姿が、ぼんやりと薄くなっていくような錯覚に囚われた。

洪庵は、左内が、中国は宋の時代の悲劇の將軍、武勇勇壯で知略じゆうおうむしん 縦横無尽の誠忠・岳飛がくひ にあやかり「景岳けいがく」と号していたことを思い出した。

岳飛はその誠実すぎる行動ゆえに、佞臣ねいしん に討たれてしまう。その悲劇的な勇姿と、左内の姿が重なって見えた。

洪庵は湧き上がる悲劇の予感を、首を振って吹き払おうとした。そして左内を伴って二階の大広間になると、塾生に告げた。

「左内が夜な夜な遊び歩いている、との告げ口があった。だが左内は橋の下で苦しむ貧民に、無償で医療を施していた。まさに扶氏の精神を体現したものである。つまりさんげん ぬ讒言ざんげん などせず、今後は他の者たちも左内を見習い、勉強たみくさ に励み、民草たみくさ に奉仕するようにしなさい」塾生たちは、誰も口を開こうとしなかった。

洪庵には左内の意図がわかっていた。

左内はそうすることで、他の塾生たちの非難かた を躲かわ したのだ。

それは医术を高め他の塾生の反感も根絶できる一石二鳥の行動であると同時に、「医は賤業」と言い放つ左内であれば、当然思いつく一手でもあった。

これにより、適塾内における左内の地位は不動のものとなった。それは同時に、左内の孤立を深めることとなった。

その頃、塾頭の村田蔵六は父に呼び戻され、故郷で開業するため

に適塾を去っていた。

その才を惜しんだ洪庵が、何度も「本当によいのか？」と訊ねた。

だが、蔵六は「自分は村医者の子ですから」と、淡々と答えた。

それは無欲恬淡てんたんというより、無感情に思え、異質な感じがした。

その結果、不在になった塾頭には、左内が就任するだろう、と誰

もが思った。けれども洪庵は、左内を塾頭にしなかった。

次の塾頭には、飯田柔平いだけゆうへいを任命したのだった。

*

洪庵の下でのびのびと修学していた左内だが、嘉永四年の師走になつて急遽、越前への帰国を決意する。

「先日、父が浴室で倒れた時、胸を強く打ち、喀血かっけつが続いているので急ぎ帰国せよ、とのこと。ですので勉強にひと区切りつけたら、

お暇しようと思います」

洪庵は、愛弟子の言葉を聞いて、黙ってうなずいた。もはや洪庵は、左内を引き留める言葉は、持ち合わせていなかった。

退塾にあたり左内は、前年に塾頭に就任した伊藤精一に挨拶をした。

「精一さん、適塾をくれぐれもよろしく願います」

「言われるまでもない。安心しろ。お前は故郷で、お前がいなくなつた適塾の盛名を耳にすることになるからな」

そんな風に強がってみせた精一だが、誰よりも左内と別れることを残念がつっていた。

左内は微笑して「では御免」と爽やかに言い残し、二年半修学した適塾に別れを告げた。

同年に入塾した精一と左内は、常に席が隣り合い、上位者が住む「清所」でも一緒だった。学業で鎬を削り合つた左内が消えて、ぽつかりと開いた隣を見て、精一は切なくなつた。

嘉永五年（一八五二）閏二月一日、適塾の天馬は、故郷福井に帰藩した。

時に弱冠十八。

適塾での修学を途中で断念した形になつたが、左内はさほどがっかりはしていなかつた。

彼は洪庵の考え方の限界をうすうす悟っていた。

そして何より、自分が目指す地点は、師・洪庵の指導するところとは違っている、と感じていた。

加えて左内の心中には常に、ある高貴な方の面影があつた。

父・彦也はかつて、藩主・松平春嶽侯の足の怪我の治療に功を上げたことがあつた。お匙が手こずり、全く病状が改善しなかつたが、

彦也が召されると、外科的処置でたちまち治してしまったのだ。

その功で、外科医ながら破格の藩医に取り立てられていたため、彦也には時折、藩主から呼び出しがあった。

そのため、幼い左内はかつて、父に連れられ、春嶽侯にお目通りしたことがあった。

緊張し、平伏している左内に、涼やかな声がかかる。

「苦しくない。面おもてを上げよ」

恐る恐る顔を上げると、強い視線に射貫いぬかれる。だが穏やかな笑顔には、左内を包み込むような温かさがあった。左内より六歳年上の春嶽侯は、兄のように思われた。

春嶽侯は歩み寄ると、左内の側にしやがみ込んだ。

「父上に似て、利発そうなお子であるな。そなたも精進して、父上のように余を助けてくれ」

そう言つて、春嶽侯は左内の頬をそつと撫でた。

その手が触れた瞬間、左内の身に、痺しびれるような感覚が走った。そして自分は、このお方に全てを捧げるのだ、と直感した。

適塾を去りなんとしていた左内の脳裏のうりを、その時の光景が鮮やかによぎった。

修学の間から離れることには一抹いちまつの寂しさを感じたが、それは大切に思っている春嶽侯に近づくことになる。

だから左内は胸を高鳴らせて、福井に戻ったのであった。

十月、父彦也が没し、その一月後、藩命にて二五石五人扶持の家督を継いだ。

やがて時代の流れは左内を、病人を治す医家から藩政を司る武家へ、そして重病の幕政を是正する奔走家へと押し流していく。

そして洪庵の予感通り、悲劇の士として青史にその名を刻むこととなるのである。

*

嘉永五年は、日本が泰平の惰眠を貪ることができた最後の年だった。

この年、オランダ商館長クルチウスは、翌年には米國艦隊が断固たる開国要求を日本に突きつけてくるだろう、という確実な情報を「別段風説書」という、通常ではない報告書を介して幕府に伝えてきた。

その背後には、オランダで日本を遠望していたシーボルトの存在が見え隠れしていた。

彼はオランダ国王やロシア皇帝の国書の代筆をして、なんとか日本に危機感を伝えようと躍起になっていた。

しかし時の老中首座・阿部正弘は、その報せを黙殺した。

これまでのように開国要求を拒絶すればそれで済むだろう、と高をくくっていたのである。

そこには長年、無二念打払令で対応できていたという実績に安住した、幕閣の怠慢と奢りがあった。

だが世界の勢力図は、産業革命を経て、大きく様変わりしていた。そのため今度ばかりは、その読みは大きく外れ、日本は動乱の時代を迎えることとなったのである。

(つづく)